

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3391000134		
法人名	社会福祉法人恵愛会		
事業所名	グループホーム わが家		
所在地	岡山県新見市大佐小阪部1510番地10		
自己評価作成日	令和2年6月26日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/33/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyouCd=3391000134-00&ServiceCd=320&Iype=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社One More Smile		
所在地	岡山県玉野市迫間2481-7		
訪問調査日	令和2年8月4日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当ホームは、新見市大佐中心部に位置し、小規模多機能ホームわきあいあいに隣接して、平成24年4月に開設いたしました。周辺は銀行や医療機関・商店もあり利便性の良い環境です。近隣に平成28年、大佐認定こども園が開設され、定期的子どもたちとの交流を図っています。建物は木造平屋建て、内装は環境に優しい「もみの木材」で仕上げております。ホームの理念として「人間愛と奉仕の精神で一人ひとりが地域の中でいきいきと」を掲げ、変化する健康状態を詳細に把握し、利用者の人格人権を尊重し、家庭的で愛情あふれる優しい言葉かけでケアに努めています。グループホームの開設以来定員9名を維持しサービス提供を行っています。サービス提供に当たっては、認知症介護実践研修等を受講した専門性の高いケアスタッフを配置し、利用者本位に努め、大切に思っている事が伝わり、安心できる支援と馴染みの方との関係維持の支援に努めています。利用者は、地域に出かけたり、地域の方を施設に招くことでホーム入居後も社会の一員として生活できるよう支援しています。また、その人らしく、本人の尊厳を守りながら、認知機能の低下をうけとめ、認知症の正しい知識の習得と介護力アップを目指します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所の窓からは、隣接するこども園の元気な声が聞こえたり、大佐山から降りてくるパラグライダーを眺めたりすることができる。地域住民とは、運営推進会議や行事などで交流し、事業所への理解や認知を深めることで、災害対策の助言や協力体制づくりにつながっている。職員は、事業所内外での研修に参加し、認知症について継続的に学ぶことで、その人らしさを認め、思いやりのある対応ができるように努めている。感染症対策のため、生活の中での制限はあるが、普段通りの生活を大切にし、外出支援や季節の行事を行うなど、利用者の笑顔につながる支援に取り組んでいる事業所である。

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「人間愛と奉仕の精神で一人ひとりが地域の中でいきいき」という基本理念のもと、職員は具体的月目標を2ヶ月毎に考え、感染症予防対策を中心に思いやりのある優しいケアの実践に努めた。昨年同様、自ら考え行動できるよう自立支援も図っていく。	職員は理念をもとに、2か月ごとに具体的目標を立て実践している。感染症予防や体調管理についてだけでなく、思いやりや「ありがとう」といった言葉が取り入れてあることから、理念が追求できていると思われる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	とんどまつりを計画し地域のボランティアと共に昔ながらの行事が行えるよう努めた。事業計画にて地域交流行事を計画したが、感染症予防対策にて中止となったが、ドライブにて地域に出向いたり、日光浴を通し認定こども園の園児の声を耳にしながら日常生活を送っている。	感染症対策のため、地域住民との直接交流は行えていないが、つながりが感じられる工夫をしている。例えば、ケーブルテレビで地域の行事を視聴し、雰囲気だけでも味わってもらっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所は、母体が行う納涼祭やふれあいまつりに参加し地域に貢献している。現在感染症対策にて事業所を開放したり、地域の方に気軽に来ていただくことはできないが、引き続き認知症サポーター養成研修等に参加し認知症の人への理解を深めていきたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	隔月に会議を開催し、市の職員、近隣住民、民生委員、消防団員、利用者、利用者家族に参加してもらい運営について市や委員、家族に報告し、意見を伺っていたが、本年度は感染症予防対策にて開催を中止し書類にて事業内容を報告している。	運営推進会議の委員から、地域住民が気軽に来所できるよう、隣接の小規模多機能の交流スペースを地域の集会所として使用してはどうかとの提案があった。また色々な情報を得るなど意見交換の場ともなっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議や市内グループホームと小規模多機能型ホームとの連絡会の開催について相談し連携を図っている。運営推進会議については事業内容の書類を提出し情報発信している。	日ごろから行政の担当者と連絡を取り合うことで、協力関係を築いている。今回の外部評価についても、実施するかどうかについて相談し、助言を得て実施することとなった。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束について正しい知識を持ち、身体拘束適正化のための指針に基づいた研修をプログラムの下、委員会を開催している。開設以来、身体拘束はゼロを維持しているが、改めて玄関の施錠時間の確認や職員倫理規程に基づく行動指針を確認し、事例をもとに理解を深めて意見交換の場を設けている。	研修の中で、言葉による拘束について話し合い、日ごろの対応について振り返りを行った。センサーチャイムを使用している利用者もいるが、行動を抑制するのではなく、見守りのタイミングに役立てている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全職員に対し、虐待防止・権利擁護の理解と実践について研修を行い、地域の中で信頼を失い、リスクとならないよう学ぶ機会を設けている。利用者や家族が安心して利用できるようサービス向上を目指している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員が参加したリスクマネジメント研修で「権利擁護とは何か」ということを学び、単に虐待をしないというだけではなく、訴えや苦情等についても注目し、自己改善のきっかけにする事を学んだ。また、成年後見制度の活用支援も行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に契約書と重要事項説明書を以て利用者と家族に内容を説明し理解を得ている。また、家族会や運営推進会議は感染症予防対策にて中止となっているが、家族に事業計画や事業内容を報告し、消防計画や土砂災害避難計画、自己評価結果等を送付し説明を行なった。介護報酬改正の際は同意書を作成し理解を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族を対象にアンケート調査を実施し意見を反映させている。玄関には苦情受付ボックスを設置し、事業所においては第三者委員苦情受付を重要事項説明書に明記し、苦情や相談が伺えるよう整備している。現在家族の面会は事前予約制である。必要時、電話等で情報を発信し要望を伺っている。	普段から家族と電話でやり取りをしているが、担当者が毎月写真付きの手紙を作成し、様子を伝えている。家族より、その手紙の中に来月の予定を載せてほしいとの要望があり、取り入れた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員は毎年業務改善提案を行い、法人内で発表し運営に反映させ評価を受けている。また、職員面接や自己申告書にて意見要望を聞き、異動を含め意見を反映させている。	職員からケアについての提案があれば、現在の支援方法にとらわれる事なく積極的に取り入れている。また、職員から出た業務改善を運営に反映させている。	職員の提案や意見を取り入れ、感染症対策のもと、ケアや行事を工夫している。今後も利用者の笑顔につながるような取り組みを期待する。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は「職務基準チェックシート」を下に職員の等級に合わせチェックし、個々の努力を評価している。職員が働きやすいよう、労働条件を含め、要望に沿うよう整備し、能力開発と実績を評価し、昇格・昇給・賞与について人事考課を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は、自己申告書やキャリアパス人事考課制度を活用し能力開発を行っている。職員は研修計画を作成し、オンライン動画による施設内研修にて研修し、働きながら学ぶ機会を設け成長を促している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市内で結成しているグループホームと小規模多機能ホーム連絡会議にて情報交換を行っている。意見交換・相互訪問・研修会を行い、介護サービスの質の向上と安定運営に向けて取り組んでいる。今年度は感染症予防対策のため開催は延期しているが、必要時電話にて交流を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス開始前に本人、家族、各種関係機関と話を聞く機会を設け、必要なサービスを探りながら丁寧に聞き取りを行い、安心して生活が送れるよう支援策を検討している。サービス開始時は本人の表情や発言に耳を傾け、目線に配慮し信頼関係を築いている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスを導入するにあたり、本人・家族等に困りごとを伺い、思いを受け止められるよう努めている。話を傾聴する中で困りごとや心配事が気軽に言えるよう努め、信頼関係を築いている。また、生活歴を聞く中で必要なサービスを探り、今後の生活に対する不安の解消につなげている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービス開始時「その時」の最も必要な支援を探っている。新たな課題に対しては、本人・家族・職員で支援策を検討し、サービス計画の変更を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は利用者を人生の先輩として尊敬し、季節行事や昔ながらの風習を通し共に支えあっている。日常生活においても家事作業を通し協力関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月家族に家族連絡表を送付し、医療面や生活面、行事案内と報告、通院日、事業内容などをお知らせしている。日中の様子などは写真を添付し情報を共有している。状態に変化があった時は電話にて情報を伝え連携を図っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	職員は生活歴の把握を行う過程で、馴染みの人や場所、生活習慣を知り、関係が途切れないよう努めている。時には自宅に行き郵便物を確認したり、墓参りに行くなど馴染みの場所にも行くよう努めている。	コロナウイルスがまん延するまでは、家族や兄弟との面会は多かったが、現在は感染予防対策のため直接面会が行えていない。そこでテレビ電話の使用を検討したり、自宅やなじみの場所へドライブしたりする等、関係継続支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者が共に生活する者同士楽しく暮らし、孤立しないよう仲立ちを行っている。職員は個々の性格や認知症状を理解し、テレビの音量や光、趣味嗜好、目線を考慮し、その時の気持ちや表情をよみとり、誰もが優しい声をかけられるようサポートしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約が終了しても面会に行ったり、家族や関係者から経過を聞いたり、情報を伝えることで繋がりの継続に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入所前面接にて思いや希望を聞き取り、望む暮らしが継続できるよう努めている。思いを告げることができない方には表情や仕草でサインを見逃さないよう心掛けている。できる限り本人本位に暮らせるよう思いや意向の把握に努めている。	なるべく本音が言える雰囲気づくりや声掛けを心がけ、利用者の言葉を傾聴している。時には、家族の協力を得ながら思いや意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族、今まで利用していたサービス機関等から情報を収集し、フェイスシートを作成し、基本情報、生活歴の把握、医療情報、ADL情報、心理・社会面の把握を行っている。状態に変化があった時は見直しを行い、馴染みの暮らしが継続できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の暮らしの様子や変化する身体及び精神状態をパソコン入力し、情報を共有している。夜間の睡眠状態や排泄状況、発言などを記録に残し現状把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の一番の困りごとを聞き出し、家族や馴染みの方と協力し、自立した日常生活の維持とニーズを抽出を話しあっている。状態の変化に対して新たな支援を探り、ケアプランを見直し、アセスメント、プラン作成、モニタリングを繰り返し、その時の必要なサービスをチームで作成している。	カンファレンスメモを使用し、担当の職員が必要なニーズを拾い上げ、ケース会議で話し合っている。また、体調や状態の変化に応じてその都度話し合い、計画を見直すことで、現状に即した介護計画となっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日常の様子を個人記録としてパソコン入力し、職員間で情報を共有している。ヒヤリハットやニヤリホット、新たな気づきに対しカンファレンスやケア会議を開催し、生活を支援しながら介護計画の見直しに繋げている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	事業所は家族に電話を掛けたり掛けてもらうことで話をしてもらい、寂しさの軽減を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の情報番組や情報新聞を通し地域の出来事を紹介したり、目で見て楽しんでもらっている。また、ゴミを分別リサイクル活動にも協力している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前の段階で、本人と家族の納得したかかりつけ医と連携し情報収集を行っている。適切な医療が受けられるよう職員は定期通院を含め支援している。	家族の協力を得ながら、入所前からのかかりつけ医への受診支援を行っている。状態が大きく変化しないよう、早めの受診を心がけている。また、歯科への受診も行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員は日々のバイタルや様子、食事・排泄・睡眠状態、入浴時の身体状況を観察し看護師に情報を伝えている。情報はパソコン入力し情報を共有している。適時、必要な医療機関に相談し異常に対し受診支援や指示を仰ぎ支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際は家族と協力し必要な医療を受け、退院後も元通りの生活が送れるよう支援している。できるだけ早期に退院できるよう、病院の地域連携室と連絡をとりながら支援している。入退院時には職員が付添い、市内共有の入退院支援ツールにて協働関係を築いている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に、入院期間や医療の必要度合い、認知症の進行、食事が食べれなくなった状況を踏まえ、終末期のあり方について丁寧に説明している。家族に認知症ケアパスを用い必要な支援段階を説明し、地域関係者で支える仕組みを伝えている。	入所時に、重度化した際や終末期の対応について、認知症ケアパスを使用し支援段階の説明を行っている。文字だけでなくイラストや表を使用していることで、家族が理解しやすいツールとなっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人内で行われる救急蘇生法の講習会に参加し、急変時に備えているが、今年度は新型コロナウイルス感染症予防の為中止となった。職員はリスクマネジメント研修会に参加し、日常の様子から起こりうるリスクやヒヤリハットを元に検証し、事故等の防止に努めるよう学び実践している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、消防署の指導の下、夜間防災避難訓練を法人主体で実施し参加しているが、今現在は感染症予防対策のため中止している。独自でも声を出し火災を知らせる訓練や、職員が作成した防災教室のパワーポイントをゲーム方式で実施したり、火災通報装置を使用し通報訓練も実施予定である。災害に応じた避難場所と避難経路等を記載した図面を非常口等に掲示し誰もが見て分かるよう周知してもらっている。運営推進会議への消防団員の参加があり意見を聞いている。	防災教室を実施し、クイズ形式での訓練を行ったり、大声を出す練習や通報訓練を実施している。実地指導で、避難場所の見取り図や災害に応じた避難場所を記入するよう指導があり、見取り図を作成した。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は利用者の性格とその時の思いを理解し、尊厳ある関わりでプライドが傷つかないよう配慮しながら支援している。プライバシーに関しても、声の大きさや場所をわかまえ、排泄の確認など個人情報に配慮した姿勢で関わりを持つようしている。	行動を急かすのではなく、待つ・見守る姿勢を大切に、さりげない声かけに配慮している。介護抵抗について、何がきっかけで起きたのかを考えることで、その人の誇りやプライバシーを損ねない支援に繋げている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	排泄や入浴、衣替え、寝具の入れ替え、電気毛布を外すタイミング、購入したいもの、心配事など、思いや希望を表出し、自分で決定できるよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	今までの生活習慣や生活歴の把握を行い、自分らしく過ごせるよう支援している。季節行事やクラブ活動、ミニレクを通し笑顔が見えるよう努め、希望の表出ができなくても好みの活動を探り、マイペースで過ごせるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髪を切るタイミングなど、本人と相談しながら散髪をして身だしなみを整えている。季節や体型に合う服を選び、季節に合うようおしゃれを楽しんでいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	感染症対策のため今は一緒に調理や会食はできないが、残さないで食べれるよう盛り付け方法を工夫したり、目の前で調味料をかけ満足度アップにも努めている。声掛けにおいては、おいしく楽しい雰囲気ですぐに食事が食べれるよう演出している。	食事の席を固定せず、本人の意向に合わせ、希望する席で食べてもらっている。食べやすい形や大きさだけでなく盛り付けの工夫や目の前で調味料をかけるなど、食事を楽しむ工夫を行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの嗜好や食習慣を把握し、栄養摂取や水分補給が確保できるよう、チェック表を作成し摂取状況の把握を行っている。体調不良で食欲がない時は栄養補助食品を用い栄養を補っている。夜間いつでもお茶が飲めるよう、ペットボトルのフタにストローをつけ提供し脱水予防に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食事前に嚥下体操を行い唾液の分泌を促している。毎食後、自分で口腔ケアが行えるようガーグルベースを用意し清潔保持に努めている。残存歯や部分入れ歯のある方には臭いが気にならないよう丁寧にブラッシングを行い、残渣物を取り除くよう支援している。うがいができない時はガーゼにて口腔内の残渣物を除去している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄のタイミングを見計らいトイレに行けるよう自立支援をしている。紙パンツを外す試みや、排泄時に自立につながるよう、おむつの種類を検討している。また、コスト削減や使用量の軽減にも努めている。起立困難な方や訴えができない方にもトイレに行く機会を設けトイレで排泄できる喜びを感じてもらっている。	職員間で情報を共有し、排泄状況を把握しながらトイレへ誘導している。利用者の状態に合わせ、ガーゼパンツやパットを利用し、紙パンツの使用をできるだけせず、排泄の自立に向けた支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々の機能に応じ体操を毎日行い身体を動かす機会を設けている。料理にオリゴ糖、ラカント、食物繊維を使用し便秘対策を行い、下剤に頼らず自然排便を促している。腸の活性化を図るため、少しでも歩けるよう促し、椅子に座りっぱなしにならないよう心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	ある程度の入浴予定日は組んでいるが、本人の入浴したいタイミングに合わせて気持ちよく入浴できるよう努め、入りたくない時は理由を探り、その時の気持ちを知ること、時間や日にちをずらすなど工夫し、個々にあった入浴支援を行っている。自分で入浴準備を行い、楽しみのある入浴ができるよう支援している。	その日の状態に合わせて入浴しているが、入浴に拒否のある人には対応する職員や時間を変えるなど工夫している。リフト浴があることで、介護度が上がっても安心して入浴することができる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ゆっくり休めるよう居室の環境を整え休息してもらっている。日中は活動の機会を設け、夜間の安眠を促し、眠れない時は側で見守りすることで安心を提供している。眠たくなるまで待つ姿勢で関わり、生活習慣に合わせて支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護師による利用者の健康管理を行い、かかりつけ医と連携している。薬の変更があった時はファイルした内服薬説明書にて周知している。咳や発熱など風邪症状等に対してはかかりつけ医と連携し薬の処方を受け、確実に服用できるようチェックシートや服薬マニュアルを用い確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	今まで暮らしてきた経験を活かし、野菜作りや手芸、家事作業など得意分野を生かし役割のある生活を送ってもらっている。個々の力が生かせるよう、季節行事を計画し楽しんでもらっている。また、日光浴やドライブなどの機会を設け気分をリフレッシュさせている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者の外出したいときに戸外に出れるよう支援している。季節ごとに外出の機会を設けたり、墓参り、日頃行けない場所に行く計画をしている。現在は感染症対策のためドライブのみであるが、日光浴などを計画し外気に触れる機会を設けている。	現在、感染症対策のため外出範囲に制限はあるが、ドライブや外気浴、大佐山のパラグライダーを見るなど、外気に触れる機会を増やす工夫をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の所持に関しては難しい面はあるが、所持したい方に対しては自己管理してもらっている。また、欲しい物を買いたいときは注文して好みのものが買えるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族参加型行事を企画し案内状を送付し参加してもらうよう計画しているが、今年度は感染症予防対策のため中止している。そのため、電話にて情報提供したり、近況を報告し家族とつながりを持つよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	キッチン・食堂兼居間・和室・事務所が一体となっているホールで利用者はいつも過ごしている。テレビの番組や音量、光、視線が気にならないよう配慮し、ソファやこたつを設置し、季節に合う空間作りを行っている。テーブル配置、席の並びは人間関係を考慮して居心地よく過ごせるよう工夫している。	その時期のシンボリックな物を飾り、季節を感じてもらっている。また床材にはモミの木を使用し、居心地の良い空間づくりを心がけている。これまで、一体型のテーブルを使用していたが、感染症対策のため、密にならないように配置を変更した。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用スペースで思い思いの過ごし方ができるよう、テーブルや座る位置の変更、こたつの設置、お気に入りのソファに座りくつろいで過ごせるよう、居場所作りを行っている。また、孤独にならない配慮も行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族に相談し、必要なものや馴染みのものを持参していただき、住み慣れた環境に近づけるよう努めている。起立困難になった方には床置き型手すりを設置し安全で本人本位に過ごせるよう工夫している。	アルバムや湯飲みなど馴染みの物を持ち込んでもらっている。また、安全に生活できるように手すりを設置している。衣装ケースやハンガーラックを活用し整理整頓を心がけ、居心地の良い空間作りに努めている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレに関しては、場所・水の流し方・鍵の開け方・排泄の報告・センサーにて電灯が点いたり消えたりすることが分かるよう貼紙をして混乱しないように努めている。行事がある時はポスターを作成して日時や内容が分かるようお知らせをしている。建物は全館バリアフリーの平屋で、スプリンクラーや火災通報装置を設置し、安全な環境作りを行っている。床にはもみの木を使用し温かみのある雰囲気を作っている。浴室にはリフトを設置し、歩けなくなっても入浴が楽しめる設計となっている。		